

『類経』の経文は、張介賓の考えに従って文字を変えたところがままある。だからこの類経本『素問』『靈樞』で学んだ人々は張介賓の眼というフィルターを通して『内経』を読んだことになる。これら兩版（『素靈』と『類経』）の刊行年次は特定できないが、付訓作業は石齋の没する寛文四年以前、出版は寛文年間に違いなからう。ちなみに寛文十・十三年刊の『証治準繩』とその彫刻字体は酷似しており、同一刻工グループの開彫であることが知れる。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）

ケシの渡来と津軽一粒金丹

松木明 知

演者は二十数年来、ケシの日本への渡来に関しての研究を続けてきた。それはケシを一成分とする津軽一粒金丹が津軽地方で製造され、全国的にも有名であったからである。

これまでの研究者の研究は、断片的であり、しかも信拠すべき史料に準拠しないものであったため、津軽一粒金丹についてもその概要しか判明しなかった。

演者は、ここ数年間鋭意研究を続けてきた結果、少なからず新しい内外の史料を集めることができ、日本へのケシの渡来、および津軽一粒金丹の研究を一步進めることができたと考えたので発表したい。

まず、日本へのケシの渡来に関しては、他の植物など多くの場合、東漸北上の原則に従うのであるが、ケシに関する室町時代以前の情報は、九州、四国、中国、関西、関東

で欠如している。津軽では、すでに室町時代に渡来したとの口碑が伝えられている。

中国や朝鮮におけるケシの栽培、とくに鎮痛、止瀉剤としての使用は比較的新しく、日本への渡来は、中国經由でないことを疑わせる。演者は右に述べた津軽の口碑や日本における元禄以前のケシ栽培の実証が津軽地方以外に認められないことから、現在の知見としては室町時代に小浜港に來航した南蛮船によってケシがもたらされ、それが日本海の高運業者の手に入って持ち込まれたと推察している。しかし当時は鑑賞用としてのみ用いられ、後に医薬品としての阿片が採取可能であるとの情報が中国から伝えられ、津軽藩ではその製造に着手したものであろう。

しかし阿片が危険な薬であることをどうして知り、阿片つまり津軽一粒金丹を厳密な監督下においたのかは、依然として謎である。

(弘前大学医学部)

クモを用いる日本の民間療法

浜田¹⁾ 善利、吉倉²⁾ 眞

クモ類は動物性生薬の一つとして、中国では、蜘蛛、壁錢、蝱蟻、蠅虎などが薬用に供せられ、古くは『金匱要略』の第一九で、蜘蛛散に処方されている。中国の薬用クモ類についてはすでに発表したが、日本でもクモ類を用いる民間療法が伝わっているので、それらについて調査した。

クモ類の種類の判別については、中国の知識を受けて、『大和本草』、『本草綱目啓蒙』等にまとめられている。たとえば『大和本草』には次のようである。

一種花蜘蛛マダラグモ也、其糸ツヨシ、疣ニマトヘバヲツ、蠅虎ハ蠅ヲトル、蟪蛄ハ足ノ長キナリ、其身如豆大其足細而長数寸ナルアリ、壁錢ハヒラタグモ、カベニ巣ヲ作り錢ノ大ノ如ク、白シテマユノ如シ、蝱蟻ハ土蜘蛛ナリ

医療に関する江戸時代の諸書の中には、クモを用いる療